岷江入楚

柏木

36

Freer Gallery of Art
Washington, D.C.

柏木

四十八歳　　匂宮二歳

正月衛門督病重る

衛門督与文於女三宮る

致仕大臣請葛木山験者る

衛門督与小侍従語る

見女三宮御返る

女三宮生男子也　（薫大将是也）

女三宮厭西源氏而出家給る

山御門降六条院給乎見女三宮給る

女三宮落髪る

御物氣現形る　（六条御息所）

衛門督任権大納言る

大将君見権大納言病る

一条宮る申付大将る

二月柏木大納言薨る

三月ゟ君ハ十四才ナリ
源氏見若君補任大将ナリ
同月大将殿一条宮渡給ナリ
母御息所薨去ナリ
大将参致仕大臣殿給ナリ
文見一条御息所亡ナリ
同月大将又渡一条宮ナリ
御息所薨去給ナリ
秋若公角匐給ナリ

柏木

出 巻名以詞并歌 弄歩

河 柏木ハよ系あるれ衛門ハまさしく右人なとまへき君達の本也へし

出 源氏四十八歳の正月より秋まてのことを見えたり 落葉

延ありし所なり 弄

秘 源氏四十八歳の正月より秋の末までかきたり

若菜下ハ四十七歳の十二月までかきたるなり

私詞ニハかしはきと楓とあり

遍昭のうんの君　河 歌を柿本と云
秘 病のことより給ふく年へりぬとこ
弁 深草十八文之
おとし小の方おわしまさく　秘 此以下柿本の云たり 少
はらおりりへき　父母よ先立ちて物思かとさせんすと
云ハ心とし　はらとりりへきすとおりしも云ハ云なく
あうくまくしみへはおしはりぬ身そとこそれ現とさう給へいひのふと
なのゆるさぶしの分りしかと　秘 桜田まとなりぬへきすり
秘 花ハくさ云たらしあしけるなれ
ひとつろの?しよ　ま まろひとろハ女この?文?しろとき
位なとまうし河?きかとまらぬしもさつきしるこ
秘 女三の宮をとれなろし去るなこ 弁
なくくの世中?き候しう　少 川?用 秘 弁 川??
河 た?此一家をとひとつの??にな?への世とも恨つるゝ?れ
少用此?? 秘 弁 云く 河此??の?界と
肥 山のとおくりん
岩 いはくまの世をハいとたん云てそ肥のと山のと傍とこそ?れ

在りしまゝにつくとおほしぬ　女三の宮の御?の人ゝあれゆくへよ思ひ
ともなふしく?ろへし
あれし千とせの春なるぬ　河 うくとせよ云よ物のかなし?れハ 古今奥入小町
待ちとる千とせの春なるへけり
人のとまちしうら恋ふれぬへき　秘 今なくなうけ女三
宮も一家こそゆへとおほしあはせるすりのわんとまらんと
なけのあはれとも　岷 女三宮のこと
秘 御なくおはりぬ人の御?れといふり弁日し
ひとつおりハよもしぬり　秘 弁少 用此?
岷 文字の身をいろ?よなはすとのとつ思ひよりてあはれの
うれしくへとやさしくぬるゝれ　秘 一家身の名のみん女三宮の御名のん
つまくあはくゝハ始へくれとおりハとりのよなり
あはしと云とい　河 源の名?よハおほさんなまと死後こ?まとりくとこ
も 源氏の名?ありとうハ給りんするこ
いまくのとぶゆんまハ　死後よ隠ぐハ人の根しならしとのるこ
うちくへしいとあはれなし　弁 如也とく

秘 なにはつの御こと源氏さすらひ給ひて[illegible]きこと也
なにとかくかたくしらぬ　　秘 [illegible]
杜しう義なたゝり　　少 用[illegible]秘不[illegible]
[illegible]杜なりしう義ねまハ[illegible]
かしこまり文　　女三家之
今ハうつりまめまく絵有
少 女三家人文の符　　秘 女三之人の文[illegible]小仲[illegible]
おりふりもこなりさしく　　秘 [illegible]の[illegible]之
柿本 いまハとくなりにけり　　秘 小仲[illegible]方人の文之
口 むかしよりかくいひつたへ[illegible]君[illegible]
このよとも後の世までもいひつたへん[illegible]
秘 源氏の[illegible]こそ[illegible]きこえ[illegible]
少 [illegible]いまはうつりハ消なてしと
あそんとうまれ給ハせよ
御情懸の一言あつハ一家の宴曠の[illegible]とせん人と
歌道よりもこり[illegible]あそんなりけり　　柿本のめのと之

歌道のことなまよみとんさり　　歌道之柿本のめのと[illegible]
これ人ともろふかりにけりよ
嫉なりハるくいふへなりけり
おほ[illegible]之
[illegible]か　　女三之家よ公[illegible]
口 人の世をいとまく[illegible]　　秘 家の式符なりけり
少 [illegible]秘[illegible]女之の[illegible]
なよ世の[illegible]
御かとの[illegible]やまと[illegible]
少 [illegible]　　秘 [illegible]なり
口 [illegible]なりぬハとしく[illegible]
[illegible]けなりの人の　　秘 源氏
おりくのよまかなりぬら　　源の[illegible]おのめすと
かしこま[illegible]ぬ　　かしこまのりとく歌道の[illegible]也
おとしハ　　秘 又おとしなりけり
あさか山よりけり　　葛城山大和七高山の一也

河 或物語云役君小角任於葛城山 古傳云 能使鬼神汲水採薪若
不用命即以咒縛之云々 文武天皇代の人 追出すなり
かはなる葛山にてありとし 彼行者ちゝ山々の奥に籠居
あらぬことをとりけん
くぬくさとも葛のかたりなりとけふまうく弟子也
とりひのふさぬの それより柿本のまうちきみさゝとかけ
おんやうし 河 陰陽師 家説并 釈明なしは おんやうし と書
伊勢物語にはおんやうしとかきうかう物語に云家おとこの
かたとくよりて女はかなをもとめ女の男やうしとかんいひける
これりしてを 弁 おとこのかへ男方にのみとなへ
秘 かうゝき山よりきたる也おとこのかへ男方のかなとさいう
まふりたる事ましく
秘 なくえてといふ物たちおそろしきも 兄 まいり にて目也
たるまの物かたりきへは 河 施餓鬼
弘 世継物語時平公三男敦忠中納言公也ゆへにいひける時薬師徳とを
よみ給りける十二神の内くびら大将とさをと
秘 首をきられさくそとそなへそのまゝし死給ぬ脳病のことにてありけり
時平公三男敦忠中納言天慶六年三月七日薨卅八 彼病悩の
時十二神の名号宮毘羅大将と云をとなへくびらとよみ給ひ
残入なるありけり 弁曰 称はかなは敦忠の兄八条大将保忠のこと
小野縁起にはみえぬかう給へる事と此比のまゝに大将軍か
藤原保忠ときこえしとす
あるし柿本とも保忠にはいひとありて書付とも
柿本の信徒よ何に人を殺生をしくしめ
おとこは何をしてり給はぬ 常におもひそのかなしとなえ
物思ひものよふもおとこの とはりぬとさかなに柿本を大切にとも成に
とむかしのふうにききなかり わた柿本を大切にとも成に書し
くあなくありこそうしなかにさと云
かへもりのとして
秘 させり書候ちぬ礼をつゝしむけかに
かゝりとも柿本をも大切に思ひのかに成ように御向かひ
弁 させつ書候ありぬ礼を先にむかいしかに公事なれと
これきて給へ 柿本の御事又おとこの対人とふみて小僧に
これとの給へり

さは御志ハ身にもかへ　女三宮の男あつかハらけしるべきこと
身をもほろぼしあるひはむかしハ世にも
伊勢物語にかく御かどみそかに后つけくば也おとこをもたせ
なりしならハしなれハ此女のいとこのうやむ后女をハまつらせ
こゝろにこりなく志あり〳〵ならハありける身なく
海士なりけりよ帰る哉の歌ならしと給ひてあるゝ世をもいとひ
弁 業平二条后をみそかにかくしたてまつりしこと　少月
なをなをいはひたまひけり　祕 源の御盛ゐハ一限なりのこと
なふことなりの御心なり心　弁 命し為しにくゐんかみハ源氏の
いかにしきこえさせたまへとハいへり
人なるせるまくまかりし　試楽の時也けるより
弁 おやまちとも此巻ニ是ハ源の右衛門督ともなりぬへし抱てく
のおやまちなり柏木にとて
玉 ししのみ身をもうそに　少川分是ニ弁祕云々
河 哀とはいかにほかる事とも一家玉ハ中つく身をもろさかりけり
むなしくなり給へよ　少祕弁云々

河 空しくなりまかり出ぬ　玉ハそらなんうちつゝんてハおもしろくいせよ
うち志めりおりやせ給へらん　柏木ハ女三の御方ゆへとうか過る
いまさらまこらの御事よ　祕 おそれしなりぬ
この世にはかうちかくるれく　祕 一念無量劫之
なり我世の御あかし　弁 女三宮の御あつかしにと
祕 一念五百生繋念無量劫の心也
心うるしかれ御ゆかりと　弁 懐妊の事也 平安なりともおぼつかなきこと
又し猶を心ひとつに　玉 見苦葉巻下ニ
うれしとうらておそろ給しけり　祕 女三宮の御身をおそれ給し
此し小侍従かおりつかる
あそれハ元志のたうに　小侍従か心なり
けりうとのうつ　祕 宮の御座なり
心るしうきてあつかゐかうかハいるとおもひ　いかりのこらんとなとハ
祕 又の御清つ猶の病形ともおしかゝりなりこといとハ何かハ
とハ若菜上ニ是より後の説之 今案心るしうきて有る度
いつくかハなとしたかうてハとし成らんなとハ前の柏木の宮に移

おりふしの物やあらんと何かと侍るなるを見しさらく此方よ燃らん
とハ下句にはハ只墓所と地と見んにしく悪皆父の方よ思へしとに
女三宮父の御文とし　もをかりぬけるハ前もに柏木の病氣と云ふをかく
本かるかかゝけしはうり御文(きこと)とうくおしはうりと云ふに
何かハをの方ハ双紙のこと(業に)父の方をうくわりといふらに
此と何かハめ双紙の方と云ふりめり是ハ此父の方にぬ此事を柏木に
きてもくも元もと見ぬなよ云ふをこめてく書うかとききとく
此義秘ハ上聞し
少たちとしたらり切とん見たるへし給らんとみハ家の柏の家紙に
物やあらんとらを待ちく云ふり方の頭によとらの庭うやハといふに
て物らく哉としうり　私此義秘ノ今案又少々の義面白し
又私云なるしう宮なりうハ柏木の病氣のうりハいらくなり
とハ女三の方よりいふくらすとらをからんとよ申給とらしたる
男とハ只今申に拓當しく見ひや侍りうりそとし
あらんと何かハとハ柏の家来よ為しぬ見ひの物やあらんと見を
いつりさらく家と末の方とにく宮しより此義なり

近女三宮
あらむといく消やさすましう哉こととあひそうかしそうりらなる
私柏の頭室の燃よ女三し立そいく消うハ柏の為しぬれ
りひの物やあらんとよりとのへとよりさし見る此給但ハ而しと
此云是にく給らんとあハとりふと給へらかと萬せよる
つうやハと云ふ同方とさこてうかハ燃らく(ハ見ひ何うちなふ云を
秘
门裏頃匣云今よ行路柳とさ宮家にみのへ此肥ゆる此柳りそめく
哀おりひの燃らし(謡　此云と後為相作ゆんせをまてく禁忌之とく
定家卿　稽勒動るとかりミく井蛙抄ニモ記せり
いてやこよのうつり　此云丁さて此をぬ見ひ出よろく仰んとに
作らうの如しあうらうらやまさに作し　秘又何ゆるすとと申のみに
方の作しさうともなう　方さしたちなむこと　私云是ハそて病者の学給
あやしき哉るぬ給の庭り作らく
(此そしよりし記をといふなり
抄
蒼頡観為跡作文字記史帝王世記曰蒼頡又取僧為始文字史官
之作書自此始記其言行以來而益之名曰書契
又近柳樂
ゆく清る哉元の燃とあぬとしおりよわらりとさハちあまし

なハありぬへきことなるへし　　弄秘不須之

夕ハよそにて

此川なかし此夕に心つりし時なたりけり　秘　川なかし此攷となれん夕れ出来へし

弄　川なかりしを思ひしとこと夕ハよそに行てはなこの證哉

あるまし状はこよひいと攷立ぬりとりいてなる人もいく征比

なたなとて人の證なこ大在ハ攷となれし時なるよ付つりし定　弄

こゝれきこし所也語りん人へめとも　一家の身なくなりれは

人へめともなるしき須とと

ゆ哉み行りとて　これまてくゝへめことしみてより

よしいてうり物かぬさまつるよ　小侍従よそうり来れと柏のまてむる

いまそつよ人おもへしと　秘　此その中へと人のおりゆくきにとてと

ゑいハむこにむら人あつへく　秘　無頼なりけり

秘　無頼ハ無頼とあく柳家すゝりもと

たとまそれしよりりとそつり　侍従か出ことのからハ知きりりまとらう

御おりさ夜ともれとし　秘　侍従嫉之　侍従よそつ也

なりよう物とゆり侍の所し記　秘　柏木の詞

それ所なし程と　　秘　所意の見之

おとしとと　　源なりけり

所出のうらまは　　秘　源の出なりけり

あしきりる所しと　弄　源氏のおとろかれし語らく人の思ひいと

らんとて語よ所形なとと出よい尤めあと

むまれ語ハぬ　秘　業平也　弄

いちし所きうか所哉　秘　柏木よそうく例くいとと

うりのおとこ君なりと源のくるしくお所行と

又うく出くるし哉　　巳　出やむ哉かそとハおめこてとりよと

秘　男子ハ名をさうりよ末形しかともるしうぬ方と源の思ひうく

かよこ女子ハ行つうひとろうよ末のひとくしとと　弄

さうくしりやし事　　巳　冷泉院の所すと

秘　源の思ひ所しを語つの家身の因果まうくまくらかとあり

此りの語一切むらひとうをまり　弄

末の世よりくかくおりいうけぬらのすりむかりり

秘　此世ゆくむらひとうれハ後世ハさうりとしくのとりしきこと

ふとも見ぬ御ちぎりかな　秘 この宮をもちぬ人へのおりつると
五日の夜中宮の御かたへ下り　弄 秋好中宮下りし夕月
弄 式部卿宮の右中将すゝみてまゐりおはしますとあり
秘 右大臣秋好中宮こと太后はことしは西におはしますとくしきてと云
秘 末の君たち宮の御方へは是ハ冷泉院と
河 圍碁　乞食する動若菜とて
御まかなひし哉
弄 式部卿のかみ
こゝ所／＼の宮のさりおほやけ御用にはなき所　河 殿上ノ騒食　庭せる石灰所　私是ハ源氏の院司とも云
かくはかさねてよしり　秘 中宮大夫　弄月
河 宮司　中宮職　大夫亮ハ下也
宮の殿ども　秘 冷泉院也
門より　今とあり
ちゝめおとし　柏木の弁君ながさきの後ものかたりもさうしとと
御かたへはまかし　河 極ハ君也
宮はさかりにいふなり　是ハ女三の宮中とうけり
さりぬるのれいにて　河 さかくハ也
むかしし東おほく侍るなりと　下宮はなきくらしのつと
ぐちかと源のうちなくらんとて　給はれ也
におひし年をと　似おもしきすハ源よにけんと知られん人の
らちなくはしきもゆゆしきまうくよおほしきますとともし（きさいへ
くさうなり　宮のつま耳よ
きみさそて　さうれにてそこ源のおろかよおろかよおりもにも
おはすのいて源の宮へあふなうと極めの源よ石にかんの宮所の也
左中将なりしか　秘 源の細也
蔵人かりし紀伊守　薫石君とは物ものしきことは也
あしなにてまかきなしあらうとくしきといふ
まめ人はまさしかりなかと　秘 宮の内細也
狩衣いきこうの御とのしき　薫の君などにく死なむ人は法と
かうしといへり
みれもいきとの御り　出家の切ありとくいきりもせんとと
なくなりとて　うせありし句論ののすし

限りの御心ちにいはくりて　物たち見むかし限りの事にて宮へ御心よ
てハ女三の宮をとられしきこと
いとうえてゆかし哉　　秘 源の詞
うき世にはあらぬ　　尼の身
御心のうちにも　　秘 源の心中也
此御出家せむこと源をゆくへくそへのこと
心をくれかたん　　秘 女三宮の源氏よ心寄なりけると　寿日
私説ハ源のうらかゝり物にて心をかけんこと　秘寿ノ筆也
家あらうとこえさいあと思ひしうといふうち宮へあらずうり
ところにへのこともしりて　女三の女宮のおもひハ時くハ心もしかよ
あはれなるくいうこゝろさうけりまかりしたつとまへのことゝなれんと
法師との　　朱雀なり
秘説にまくおもりしなれ　　秘 源の詞
うきうりとうせむにはへもたいうなりあらしをさかれて
秘 宗よと　ちう事あらし也　寿日
山のみちとい　　朱雀なり

さてうしよりもうりのくへの　女三宮の尼姿の心さ後なり
法のいと心しうり　私ニ申云ててつる時より心ざしの時
御帳面あるくいよくゆかしくおもしれとと
女三の朱雀へ二ッ宮御帳面をあくやとうあしとなるこ
御心へなうせそゝ　朱雀へ女三の御心をかうへ参らしうこと
いとあしうらうあしと　朱雀の御心中なり
ようこうれいくさものよ　安房よきくれと
白 李部王記云延長八年九月廿八日申剋法皇御加持法奉訪
上先是上詔侍従令弁依法皇御命用大衆子二脚鋪物上加
褪、奉詔役上法皇勝御座傍眼息加薄及請靈男女等、あれと法皇勝
香加持す勅あ卿え此御法名すアリ
あらしの法　　源なり
世中をとうりみて御しう　　秘 朱雀の御詞
たゝまのまうあらし　　安房か不定くあれりと御理ハ定少不定と
この世のそうしまし　　当時の人此なしきと
うゝや御しくへたらそてまつりあよ
朱雀院の御出家のさ後ハ我源の

うらやましくいつとなと源おとゝにも源と
すゝひかしの御さ故　秘 源の詞也
御丁のまへよ　女三のおはしますれ帳の西よ朱雀のおはしましゝ也
文をとりてはくろひ　女三ゝつくらひかへへくとりてはくろひ
うちときてれ丁のゆみれはへおちつかし朱雀へ御行也
よろうちのさうしまね　秘 院御付　廣居　加持僧
まさかんなくはうりれ　河 諸付　寛平法皇御 加持のみ
あくおほつかなくおほし　史 諸なれおとゝの御かよ加持の事わかはいりて
仏りとれ寺の仏おもりやさおうくれらんしもれと
文もいとよいおさよ　女三のさ源なりせへへともかゝ時は出家ありり
日みゆを朱雀へ又中のりつ也
何ら御かいおくは　秘 院の仰なり
捨て来とのきんへは　秘 行末はよこうれわかれはくうりてへのそ也
ゆるへしと　和 命とをさりおらは絶へしかさりおらは行末
とをくみさりかたうしきこともくはとゝ朱雀の御用捨也
おとゝれ君よりくおんさしもかりよと

源氏へ女三の仏中を朱雀御仰つおひ也
河 源氏法号以後也 此おをよりもわうしの院とかりりて又おとゝとゝ
おくわりりは女房たちの目をうつきもうりましてにやうらし　又
の御ひ也 女猶猶の中まもとりやうれ見はおほ
私さしこれおいとは女三の出家起しての御いしらし也
それ多ちけなくへき　史 出家の功徳後世の為ちけとあるへきこと
日比ともくおんの絡へと　秘 源の詞也
さけなとのへれ仏のちしてく　和 気也
物の気せなとしへと源の詞也
物の気のましへきくと　秘 院の御詞也 物のけのいふ詞也と
おしうくへきまうくともつくること
仏のちらには　身 朱雀院の御仏の内也　秘月
さしも仏行しゆうしらに　源のとしいしも女三へ深なりし
るいとおほんにこ
見よいてしうろくゆて　源のことゝしきこと朱雀の為御也
さくらみへんるはかくはあゝしく世乃よとい りよらん気と

にほしく作られしと
ふ白おりまりくえるれ　秘今仍ゝまハ又けとせられへきたるれと
本ともそうかす後ゝつゝく　秘今おほしめさんかハこゝくに紀しとと
秘よめのつ子これおほ家る事しハいくハ源へ述懐めらん而都史ハく
おりまよう紀時見れとおほ源と
たるとぬらしろとまハ前代　秘たゝこたらしろくにや（きん）ハ源まさ
ありしかと源とハおもやさ源よおほしたくゝのりしゝり
たぬりいまおれとと　秘台はこ秘の義ハうし今女三宮の出家しゆよ
とふ太うこぬうしろきとハ源のたのまなれね（きた）すりしとおほせと
右し所つきとさきゝ本ゝくまゝ白し　ゑれとあつけとさうしまへ本ゝと
まハ前くてとと　秘台前しあつまとさうしきうしまへ
秘源源にし義のひそとなり　弟女三宮源氏とたゝしきまへ白ゝ
まハおほ家しのにうし仍ちうしぬうしろうきとゝのとおほさへとと
れたうぬんまおりしろき宮　秘二条宮と
葉のおちものし而と　秘朱雀よりり女三へ仍宮まて
かのおとしと　源なり

さりまてしいとかつうよ　さハうりものまりれはとしたる飛の序
後のんまみ源の跡異ハ何らしとと
三台たくへとと見たちらん　御為世のうちよ源の事しの
かとれらんしたらんとの朱雀の内台申と
いむことうけあまたらんまうよ　秘戒とうけのそらんと労く
諸縁なり源（ま）とと
うしとおほせうくと　源の女三への事うしそとおほ家れまりまにうしこ
なきとうしいくたらくと仍りまりしき　秘源内へつく女三へ戸さりし
ゐわ仍くゐいのひてしこて　源の女三とゝさ後くうしら（戸）さりこと
かゝらぬりていとうゝ後ののこと　女三のさ後と源の戸の事
まさうけ後ゝねこ諸句行しくのかふとおほせと
にれおくさくらうめしく　弟女三宮の仍れる氏や二仍く源
氏とものはらくとのへ台わりと
とうきこしてさうはおほ　白ゝ後
いさうめんのハまとそひゐそらふかとよ本のれつゝまおゝる　源の平往としたに
ゑりゆらんまたと　朱雀院の作なり

たゝしきつゝきありけしいけれとく　女三の出家と
めしけれては篭中なり　源氏のさ御と
おもしいふ心のいかへ源氏に　朱雀院はあしくて女三宮と申せ子にて
院はさりとより　おんしゆせは志かはまうこの御くいへまさく御し匠うかとおもふ
しらく源氏と申後見んよしありし
うくるとあいりかたらく　出家になく世にて平安なおりしませと
御ちらくぬるよ　朱雀の御ゆるの所とあいかれ御さ御まりへ
宮は御後見のいあり　女三の御さ御と
えんこなまいつにおもよくしきこして源氏に　朱雀への女三の御
いと御ういの所と　女房まよ朱雀六条院へ参ん御ゆき
むらしおほしさらこ御出家よ
あらしことあらへし　秘 源のかりし一度の思たつはの乱ことえとく哀世ゐと 日 异
おれらんせらまそね
らうかいしき　乱りはしき所と
ことさらなり　よそとれ山へ参りて御さんとの御かたと

世の中にゐ宮しもおりたちかよ　朱雀の御詞と
うれ御出家のことさりせねことなり　秘 女三宮とおりもの（まへ（あくてとと）异
まうしけん（とあくゝく　源氏の御口にいなりけりやもとこと
おおいま程とおつさりけめん　秘 源のおれいて此院のうちよ御の（へき
さ御ことよりそりゐて　御のつへきにもおり経とも
ゐりといふことゝ又人ゆく山里なりとよ
さ御よ志てこうかく　おおかりありあ里まく　御篇よりもさ御よ志てさうい
珠黒わうれと源へ御つめつこ　見いちゝ朱雀しも御も御の所と
ゆゑよりゝまうく　秘 源の詞と
源のとしかくとおいまてひ源氏に女三の御おか家のことに心とみさ
きゝく何のりもえん道きまへわとみつし朱雀の御宇中と思と思
しらくかやうよ中のゆへや女三の御ひかるりそきりぬへく
朱雀なおおほせは御理おりへし
ごやの御かぢよ御りのく宮いらく哉く　源 後夜御かおもと
御見所の忍果へひとりそいうりけしゝ御とは紫上のゆりそえん
かしうしとりけしゝ御と　秘 紫とそいふなり

弄 紫上とりなやましうなりての一条御息所の果なり
　　　　　　　　　　　　　一条院物語に小一条院女御
今はかぎりなんとみづからもおぼしなりぬるにもれきゝ給ふにはかにく
弘徽殿女御の御気色にてかくれ給ふ御女御二宮なりしなどとく
おろかなる事は御物気人にてはきこえさせ給ふのぞみたり
身をおもふゆへかくなるへき身なりけるのみのた
いとおしうおもひやりけり　女二の宮わか家も物の気のさかりの
ふかくかきさだめいひけり
宮もこうしいきて出でくるに　　りのくに給なさりけれはかくて
いよいよおもくおはしけれと　　おか家し給へ（え二）
うれしくとも多いかりけるに　　御おか家するに色々いのちなれはいはゝ（二）
かたみに御すゝめと　女二のれ出家のことなと柏の守てくいはゝくはしなとときこと（二）
女宮出家　弘 落葉宮なり 弄曰
ちくはかりゆめみることなり　落葉の宮は致仕の御方へかへりてうり給
りん吉日に柏の父おとゝ母北方なとにつみよせいるゝ（比へ給
さん給けりとこ）
又このきはにはかりなんはあるくしきこゆる（二）かく（二）

かの宮よりうしていはひてさい　弘 柏木一条宮へ（二）こさい系へ（さとき
弄 柏木の女二宮の御方へ参りたてまつらせんと
申すよゆるしやすく給へれ　弘 又母ゆるし給はさりけるなり
おほかた色は宮の御こともそこきこしめしをかゐ
弘 落葉の御事など柏の御ゆかり色いひいそくとと
母らやさしけれは　弘 系図なりけり
このおとゝしれるうち　　あるしうち君起（二）
致仕大臣の息よ申給つる為なる事は朱雀しゆるしなりつとと　弘 致仕大臣（二）
二条の宮は御事など御問ひそうらん　弄 朱雀の女二宮の事などのゝしりぬる（二）
弘 女二宮の御ゆかりのことも御かくれはさりやうなれはくさいへ宮の事
かくしけりし思ひいり　柏木は御かく病のきはゆりくる所はかなく（二）
さ後くよいとおもしろけれと　落葉の宮かしこも果すれ共身
をそしわれちなどさり　弘 不堪なりけり 弄
行おもひさしおりつく　弘 柏木は宮のみやと母君へ（色申給（二）
いとわかゆるしなりけれはさてきまつりてい　弘 柏木よおもはれけれは
かくなくまてとなしとと

辞世例

右大弁の君ありて　叙後に紅梅の大臣といへる人に哭

私母小方ハうしなきまのこなり義絶へ表をさゝゆおほねし

合人のもとにこれよりかしこ在京亡なりしかいつて

よみけるよ檀大納言よさる絶つり　柏木但大納言人のはとく

せし程ありけり

よろしいまおりいおらしく

くらしてうい弟日しけれんとおほしおたれとその声うしと

ともよれおほらんとたん絶よいよくうかしう　叙かく檀大納言ゆりしれ

猶但あとゝもおもかへとうへこいよくおもらしきうこと

大相君　新夕霧式部大相ととゝ猶但ありの未来見へこと促と落葉上に

君へさりん　私いと弟　私只右大相なりへし

御かりこそいまゝも　汝果色を堀せりおこし

山おちらりかあいのおもりこ私との流けとゝいへるなき

着色果色を堀せかへの流とゝいうりさ成とゝうの流いさうりか

貴いうかかりへし

おきりのことも　かしたる来病おりきこるのし

ねともかくし年流さぬ　夕霧は本乳波けりまくらき柳あるへし

しらなりひとは見にいや見出ゆちらく　柏木平郎なるへく葛屋が

らむ春へしく追絶をすともふしうりされとても同見まり病の

おとりうるあるよ今ひとさい追のちらんとの葛屋あるへし

奏もしちらくなとい葛屋しかへうしとなりけり

近楽定枕絶栗田前流病のほかしに関白なお絶れよろこひしに小舵

京友さりけり絶へりなをを御出をおちてしきなをいよいれよりなり絶へり

ゆしありうれ葛屋ありくさうりわちらいとおりかくとあい浄の

さいさく欲りさくへ御ゆりとの追駒らあかきうに流なるくも合然ら

よりゆうこひけりを折く猶流れともさせなりの屋布をいとくもよ

とねゆ行くてあんと今ハうく南りのあゝ絶れハ公私よ従く大小のけ

ト合せんとかひのうきを庭を礼とも各ちうら小庭りきうこき

よ妻内ひつかあとこまやうよのゝへところと葵も流くとそれはこ流

あといとらりきと風のうれと吹わけうりたさ庭うりい小の座

れいろも多うかひいさきうつうよおちすうかへよいえしにとの私よ

不覚ふふみもうり病中の但友却あらてあへよ葛屋ありの下

何ごとも花なり
ちやうちんはさしつへてあふみちなく　必 幻なりけりと
柏木夕霧の中しと　親類よりも大切なりと
おやたちのかり　紅 夕霧の公中なり
ちふすまよろこびとらく　紅 夕霧の付 早
なしとかく身のりしけなく　但友の筋にむかしよりんと夕霧
きよくはかれよろこびは
のおりふりさも不義とおもけくなり
いとらかおしらう　必 かしたち木の紅と
表わりしたりけり　白衣すみぞめ烏帽子たちうりきて参りけり
おもしの何よりおきたりけり　病中にも色ある男と寄りと
一世さうれいさらしも　髑 荘子 実 様しらぬ心髑髏
父をうしなひのつか　紅 夕霧の付　紅 錦おり 不及川公
ともかくさきみつ思ふておくとまて
此 影なゝ荒れの霧りとの宗や世の中ーのおくれさきだつやありおんは 遍昭
あまこえにおちりのうへと　病のさ夜もつるよからきねとし

公よハおもしろくなりかゝりしめと
月日も廻りてよるなり行りよ哀れと　紅 柏木の紅　ひとしておくるめうり
よらくぬすうかとなりり
いまはうきしんもも
形見のちりりはや　此 現公
此形は身の花はよとりくもいき添しきねゆへく河し哀れ柏の
公と花形といそく知らずのかと
形籍立形見をまもく命はうち付かと
さればこの世の　されば又さうりかて寄るは身とし身なりにお
来るとまくいひのへうり
おやのも流りつりさしさて　父母はさきこまでは孝行と
流らはくきるのもおりぬと　さんく諸句熱孩とかくかのと
君まれうりきうかるも身のれの後まなく
平やと孫仕と紀紀よとりあるりし柏棺大納言今年大成立の筏
四海統いうくいまおのたの役すなくしせ行かと　早
身をたつりかんかるさ　和気は世の立身の家なりへし　此は信
のち後さ海面向し　孝経云夫孝ハ始於事親ニ中於事君ニ終於

立身出世とのたまへるにやと今案之　開宗明義章第一
又世のうらみ　是より柏木の源へのかたみにこ侍りしと夕霧に言はせんと也
あるまし給へきと　今は世の中くはしさはしと也と
これを源にさとりの給へれと
弄 見ぬ事とかわれはしらずさきらんし夕霧にことそ給はりと也かんと
さ候へなから言はれはと　弄 柏木詞
世のうらみをしうち侍り　柏木の世中まかせまいり侍りなと
世の中世をかへそう　源へおぼえ給ひゆくへの世と
ぐその世と　楽府 佛頂識示日と
これらしきとおん身をまいり　源の言ふ辞をしきかすかの時のこと
いとも世のよきかへ思へしとも　弟は世の中をかしと何のいとしきとあまり
人々ままにおほしなしさりきたるんと　秘 源は人々ますとておほせ也
しかれとものこと
いかなるさまもうんなとの
ほかにのちの世をは世をさかは　旧 継言　弄秘 おほし
後世のさとりとしなかる人へしと　今生にはよひがたきすへきかれ向論
あきらかに世のかさ給へ　夕霧はこ源へおもひも世は給へよと
なかなかんなしくあると　死なかん後をと也と
世のうらしゆかされなかりん　旧 孝経辞有るす
世のうらみよおりひあくた給か　夕霧はかれ世にはなかる女三の懐妊
あとのあすまことくはなかくといひとらさきとし
いかなるはれ世れおもふてかは　秘 夕霧か詞
くおりり給へつかとしと　かしこ木花意の所へと源もなけ
世のあるとと
かとうくおほしことあるかなまくは　源は何の気をきたる色なきさ侍かり
君云 柏の世よ思ひするたとくの源はさたりしそと也たり
たのしこなりくへき物なとと
とりくさ候はしうかなしう　源への子しこ侍りゆくへ病のお
りりうかと柏のかすよゆくへよ夕霧かなしく後悔よいうて
きよいさしかとひけしあり給ふか　秘 柏木の詞弄
旧 伊勢物語 かよひとなりいとられつかうきつめ気のたと
徒ゆよ行たとさはつのなくこさし　かとこきかしにをとは思ひさりけり

今日不知死明日不知死何故造作栖安無常身雪山鳥唱曰
私はすゞとりふ及ちなと　弄秘　川云モナシ実ニハまこと
これらいくちん給　夕霧ハその公ぬハ推し給へんへまいらしかると
一条より此のまゝ　秘 落葉宮なり
給ふとまうとこさらしめされ　朱雀院の御子
出させ給ひ給とくうれきこえし　手擔之　柏木のことをハいたく
まかくまゐと志てうりこよろりくろりさう御と
なくく出のひぬ　夕霧れくりのうと
女御とハさうにといそれ　秘 冷泉院女御之
弄 柏木のいりうと　弘キ殿之
大ね（れ）うさ　秘 雲ゐの雁なり　弄
右の大殿の北方　玉うらつ　秘 玉うらつなり
やむらう給ふ　奥秘 以下給此義之
向 られてそいらんねんへうつり病と給ひ給へうりかみよやむ葉子
宮よりとにてよみいかんしきこえし給ちく　秘 落葉宮之弄
わたりのきてしいろ御うりまう　柏木の給西宮之

右 世皆不牢固如水沫泡焔 泡焔 幻世春來夏浮世水上泡　白氏文集
とし比さされなとて　秘 柏木ハ女二宮のつけ　丞 女二宮ハ女二宮のうへ
給うきうしとこともあし　うらむへきうしとあしと
女宮のれれ御し
とかくみやしり里や
まく女宮とうてと給かりまかとおもうしも見とおいおかしと
弄 かりしたゝさなれ藏めりの宿まりしきこん
御息所もいうしうへまいよ
私曰女たのとのれ候しろを御うかすはさんへのまし給わかあり　必 落葉の母ちや
よ御自うしうきれ様のとれ息所らるなめく之
おとく北方ちとハ御くいろんのこ給く家にてえあく給
必 或説云致仕大臣ハ清慎公のほかすに推しくなと尽し給へゆ
大臣の御ハ敦敏の女御のおとくよさゝ給ちらへく此内のいかし
ことのつりたの此子なく梅の右大臣ハ廣幡公の暴食よ御より
廣幡公弄女御右大弁をま〳〵ていり世次もち後前方りくり
敏の北ねのこ世のハ御をと志そく弓るをうくまくりいれハおとく清慎公

まことなる人ともなかりし東宮にも一家にも行きてこそ侍へりし宮の
はすし家にはおもはしきを云を　必女三宮に柏木のとうしてさくさありと（弄）
まかる君のゆかりを　薫と柏木のゆかしくさいふか見えし
うらなくはかなしいぬ　女三宮の御さま也
これ君のいたれなかとぞよ　必うつりかなり
物かうりなと言のよ　必嬰児のうちにあそびをするに（弄）
ゆことのりのかうりなのはかなくに
わかちさりなくに　必源の親也
まいのわの所にて陳ぞなく　必さ陳とぞ人猶はかりにはかりかく（すゑ）とあぞ（弄）
日をにはかりなかひて　源の姫宮将なるか也
御いかよりはいまいてせのみんとて　旧五十日の餅
旧大鏡云延喜御時五十日の餅を村上天皇の生れさせ給ひつかの
餅をとくいさせりかりて伊衛中將のおりかにてか給ひり
いとくおはゆかめり
のたせよんき来りていらりけりとせさまての日記なるん
れみしれうとのせちせおたりゆしかうけなきと

いちいゆかしとはまかりは百とせのち後しに侍りせぬ月をしてこの
かうらことなかのこさ陳を　必居宮まてさしゆには
陳よてらせのかく　源なり
なりとよせ女よりの陳わしてそ　必男子なれは此の説の居なと
居の事こそうりつのゆしきとこ
おはしまさら　女子なるは女の出家さうの時はゆしきをひてゆへと
りとのなと云ぬ　かの色　根なしのやうしと云つねこ
いとなるしう陳たちゆき　旧六条院入道の宮のよしなるか
のこなるかまうやうまよりくなる陳しと陳ちゆきといふ名を
一説云大臣は柏木子とし女三宮の所服なる故大将の之をなるか
さなと陳たゆかの陳（き）よあかれにいまう右馬頭備のあ由の中なるに
かやうしの説の義なかと思かのさあなるしくとある
秘河海云説とてもよ紀あへし
ねらんはさて源の実子なるなるを人の言へこくれり
なく新の云中にて大中言庫の云なるしうり
れらしの山清ろせう　必さうけ花のさ陳かりをゆさ奴りのなれ

昔ハ盃花とて今世の喝食なとの座しよハ...とも又東とも
ためしとなんいはれける所云々...
[illegible]
おとハ...とハ...
本丁とひきやりて為給へる　女三宮のさ給
いとをちハさあり　河　盃花なり
...しといふ
女三宮の...とも...さ..
すきくきゆり
弄　...
又...　秘　源こゝ也
...　秘源こゝ也
いまやう...
河　今...
弄　とアリ...
...なりけり
...

いとあはれなり　秘　源の詞
すゝみて...　孟　よ...
めもくろし　秘　...
...
今...
とりて...
河　とりて...
秘　かの...
いまハ...
おほしたる...
御心とハいとひすさく
とみへてつ...
...
...のこと...
柏木の...下心なり　弄
あたりの...　必　源の...

...

いまさらになにおかいはんかの子のきふしさうき世とはさてすゑ
の字あり　秋の横笛をさしき葉のなかんを結りて　ゆらふこと
ゆりこうによわたしたくみ行によおとさろし　夕霧れおきれしたらよいはぬとこ
大和なるのぬらこおい　秘 おりしの女のたくぬるのつると 弄
女御の後宮さら　秘 王相なりなり
ゆうなきたれきさく　おもしきせいおりし　ゆるとこ
旧 五気付　武王家　必 柏木なしつること
そひるしうや　眼の中こ 弄
きれこゐのしとらんに
旧 眼子 遊仙窟 又肝勝　横波　眼尾なとうなり
文ハさしきを　女三宮ハわらんしきらぬこ
多てひとこころかれ　源の幻中にちらりさ海く～ひなつると
ゆふたといを　かはりの五十日の祝なり
志はりよおりいてきたてよるしつり　必 楽天か句こ何海よみたり
五十八翁方有後　静思堪喜亦堪嗟　持盃祝願無他語　慎勿頑
愚似汝爺　白楽天自嘲詩

楽天ハ子なくしてきまよのそしんこ五十八ゆしてはしく男子をきれ
むまれけるをとろをよよりそく世を遁と名付それよ白はて作りける
詩こ源氏五十八おそくありまおはをきゆるこ五十をすきり捨さるとあ
なりけり解説こ　伊行ハ云ひいてはまよたらんとうきてく
白氏文集云 此身何足貼 一聚虚空塵と云句を載けり
五十八をと流よりすくしつ　必 源氏五十八歳こ
弄 楽天か詩何海なりきくより源氏五十八をといへり
いと抱あそんけり　源の幻中なり
十二年 海のちてよとしいさかんきわり　弄 楽天か句と川そくしそ未来
るすをとしにの後ろの葉よ落しきて又よ似てかなるかんんとこ
秘 楽天か句を川して柏木ぬすをとしにの後ろの葉よ落しそく実又
よ似そしとおかしきらんと草の葉の花のをしいりていうかこ此忠き後
かとしてこ此物綴の事一とこしさへ入けんとこ
志のるりぬ公きけるか　必 女三と柏木との妹こ 弄
うつかうんよい　一家のかうりハ女の伝為くりしとこ源のりハおし
猶ちぬ辞稀こ 弄日　おへかんとハ思ふかんこ二をいへり男ぬさおより

と女の心つよふかくなりけるに今ハ一筆不叶思く
源氏の家のあれたるに　其名のあやまりより人のおとりなるへし
さらくを哉とくとおもへなんといへるは此公に女の心ゐるをのみこと
いとあるよ公なり　秘 蓬生なり
公ちりさうんハ　秘 人の心ひとつになりけるかなりしと云人もしなしと
おやうちぬまうよおもふけしと　必 枝付大将柏木の母上なとと
ちうしきかつるを　弄秘 源氏とくちうそれまうにし源ようの娘の公まうや
公能合なり　秘公なる公の心さふくて正然人 ハと弄
おいわりまりやとしらせは　かしてふれ在生のさ波と源のおほえ
人にまくりかさね　必 御従者とたてしと
この人をといひて人のよや　必 源の紀と
うかうあつかへて　女三宮なり
源氏 たち世よりあねと波きりしと人をけしいひていにも出ぬはにこうつれ
旧 捧もらいそく人の小君さうの世より万代のけそく人のとよまきさなん
弄 ニ川ク此公なとより出つる公に　秘 月
此公を川その種いつる波きりしとりつ人きさそとに面白きなるに

のれつゝのかなり　旧 蝶　女三の心さ波なり
ことりりとおもかせハ　源もこともありとしひのれそこ
いうよおもかれん　必 とやの心こうありしいふをといふて　おもかせ
うんと源の思ひのかよと
あしたにいと　弄 女三宮の前しう此事ハ思ひ源へしと
大ねの思いハ　必 こうしよりり夕霧柏木の造営のるるをおもひのかと
をこしねたかりしさうる　弄 りしハ年よもありくさうりし時と
おかよわりりよせくくく　来訪よろくとてしらハ分のよ字給ハ
ぬとゆふ書なりけと
ちうかれ君さうらよりりハ　柏木の生枝なりけり
女三のくきをとそ心哉　弄 夕霧公参なり
秘 夕霧思ひ公中しなり思ひおもかせのよなり
二条のうへのさいうり　紫上の御家をいふて源の割しのかし
あとといふ波屋うわらへしと大まくよ思ふなり
思ひそくちり　二度く思葉をもらそ侍と
あをむかしよりあいれうあり公えて　必 柏木女三宮のけのほにしよと

弄 柏木はちゝおとゝよりこひけしきもなくいみしうおもひのをと
いとゝうりくちおしかり　柏木の跡を云夕霧は宮に負ゝよりてかく
こひわつらはせたまひし上をも見給ても地こひしかとおもひやるかたなし
よろしき事なれはさて　秘 たまの緒なくてはみえとりくるしきに
こともなしのをと
さかつきとむかしおもひいてたまひけり　秘 同果なりくるしともと
女きみにかきいりて　必 雲井の雁なり 弄
御心にかけたまひぬかりし　柏の遺言ありと申出して源の御気色を
みたてまつりて思ひなれはさく又あひまみえ給はんと
あはれなるかな月日を　伝 地ありとある月日をあはれなるに
うりすてたまひて秋にもなりぬれ　秋も夜は今
御子さのおもはくなるくしく　消ゆの時の法眼さかしくは
俊の本地なとたり
君かうはくらく　兄弟姉妹なとなり
右大弁の君　五條たり
奉よろしくせさせ　必 致仕大臣

弄 父母のなけきもけにはかなしあはれなり 弄
うちはまして　冥途のさはりにもなりなむと 弄
一条の宮には　弄 女二宮かしこまりて宝之
秘 かしこき御かたより陰陽師の祭祓なとせさせ給ふなり
たゝしうつひなとしたまふ人は　柏木へたゝしくなとおもふに
人はかりけくとと法師中に
古のこのかしたまへる　伝 大鏡云延喜右揆節のとき人の口惜きに
と仰て重陽と九月ようにせさせたまふ九日の節は是より
御つくゑ一年目左大臣家の事よりて御薬なと
そのかたのすゝかなりけり　ることなれはなりけりと
うれしくなりて　必 弓の長薬飼なと有役なり紅類之 弄
ひたすらうみなとの絃を　うちすて時は諸をもちさわかれたるに
絲をとりて琴　実 絃人の所よりもしてむかれうかあり
ちてにとりかけ　比門の茶まかくさうをおほえやうやうかれは云
わすれことのく　秘 さうぬくそれこうなり
琴とのかしこは木をこひかくいかなたりけり

大将とのゝおはしつるなりけり　必 若菜下也

弁 頭の弁なりしは源くまてといふ殿数なり

弁の君宰相なりとの　必 柏木兄也

うやまひ給ひて

夕霧衣なと給ひつゝしめしぬへきこしめしけり　必 落葉宮の御母なり 弁

いらへもこゝろならぬたへなれく　必 夕霧の詞 弁

されはきゝゝまさはし　兄弟親もといきゝうたるさそこそさはと也

人はおほよそ人ゝきゝやうなるたなれはよの給ひよおほしきこと

いまはのとにもの給ひしをくるす　必 一条宮のなけきを遣はさるゝにかりはと

あまたもちかりて義世なれと　必 家もしへともゆるせなれと

家もかくんうけりはなき宮ゝしと

とかくされつゝかとの宮うちゐん　かりけるそれはさる義からぬ夕霧

れおさうかとひとなり

御とさたなと　日本紀云　弁

二月はひかりまとまさる責作なり

弁 二月年ひかりなりけるぬ

手らすうりゝこ中ゝくよ　立なうへことあらたし中なと

にく今しく延引ちくうりとし

おやこのたれ　弁 況や女二宮の御もとにはといふうり

くは問れさうらし　必 まき書のさりと

さうらしうな夜もいさうり　夕霧の極秘なり

あたれなるまゝは　必 御息所詞と

弁 常常のあかりとかいさ夜ことゝ

うしれうりぬかん　御息所の家もれるりとりよ

さうりおもしけりりさうり　必 落葉宮の御さ夜

女 女二宮御覧ゐるり

いましくなりくへさく

くかさしくなり　御息所の命ゐなり義とし

とのつうちうきれさうらひ　弁 かしは木ゐすとて小方にあやうくあなかしと

たしめつらこうけ手なりてさりしことゝ　必 かしは木とゆふ霧とぞとりよ 弁

秘 此宮をうしは本よりの御ゆりしことれかは若よあうりしあしと

弁 柏木のうらくへは此つて夜さうりしとと

秋山の対は息所の玉川なりけりと何れも此家の対かをつくし
つりこうしは御息所の玉川なりけりと云のみつゝ
うつり給ふと哉らく
必 此息所の公れとよみなすやと云じこ 事
殺伐の熊切よりのゝ在朱雀を此月などさうは家なおの及
きわなりくしと云ひてぞ薩よりは此息所を月公卿もしとし
明らかに
うかつれ公のおとなん流ようしを
必 いまちらと公流よくりひ
としめ卩さんまつの執ととし
必 それしらくみ世あらくきつとかのらく
それともやうれしを
そひしまはわりにとし 事
天こさちは
秘 年しみこくそちは何なりしれりのさてこ陣り給
御すむ彼とおりはさりむりし公すくもりせとと
いたりこ身とも
必 中そうなりなり
あまりはかく何れみそくよ
此おりひの流いでくよむおしく落
慕の名のいてとらずしりなるのとこ布字をおりよゆくと
流とつひいくよ
必 夕秀れ来りあるのは今始あり去尻
此様へしもくうひく易のみとつれいより 事

何れかの流ちきり
必 瓦古恩番と二家との流中にそ小やゝにも
不んえさりしとにいまそのきはのり二家の流すなと道家頃こと
吹のへは我よもう作しきせはまし里伊りなかとさそ流
息所あ我のつかなり
秘 柿本存在の時は此家を云ひれその根本は何つきりしたりかなさ
よ遠云しりつかと史は何りつくきすとと
う我よとう作しきせはまし里伊り公亦とくいこてあいめよ
う作しきとうきし公はひとつなくよりれおりのは源あのなり
秋此月あふ夜と
秘 夕秀君石対
あわしう
必 是とり番香れすりとちね君石緒のつこ
事 かしたまの帷披りつこ
こよ於うおとうほき
必 かしたまれ帷とりつとよ風とはおと於しきこ
とはつてつや
ふ世あり人とくくれ家すかとと云ひ会すりとと
あまり在の事よりと云ひしり里
必 学の流と於く執あるひ
の座よつかしは世界れ家とほくあけきこの事とお侍しありけり

まこと給きみて佐渡まゐられけりなと
必 なきの道理よりて世間の栄花を人ともおもはぬ人のこと 必 色不佞也
すこしもくつ給ふらんしるらんに
河 ことよかくよねはさりにひてらきらる賢聖のこと一筋なり
水原抄云古本の云なり　箒木文ならは涙ことよ大きさた給
いはよいひいれとしなき葉はとりれにくも給まりをぬれいふらく
不中庸なりけりしと　私説あり　いと河海
くりてはなきやうなりかくのおぼしくたらく
河 かく給たまひしとはとよなるなと　云ふらしくたらく色葉也
たたいおもしやまゐくてきらんやまとしまねとりの給よなきやまにいうと
いはひの義なとゆかにうせらくなうひなれたさのともには云まりけ
めよなといさめしてち給ゆへの男ゆかし給りのこと
秘 明たりの給なりなとたたいおもりやまゐくてきらんやまと義と
のとまていさ給しとと
河 まこともくいふと聞くまゆまり　きさ夜なりさやうなりいへは
ちなやうに人ならく和気なる養なり玉らうの給はうとにそ

夢逸のおぼし　ある義ねといふなり
云なさしと　必 夕霧とは云なきへとおもひはしこと
よろづのよりゐ人よ渡さり　必 されはそ渡さりて女二宮おぼし
おけらんところ出たしひんありけまてとしこと
それまでて女云々
河 文云猶んは次とせむとせとらしへきこん但いはれいうしこと　必 かしいさまは夕霧よりも色衣の宮の兄と　二首
ひなりし二三年とけり日なたなり
河 おもりいひとさらのけたらいそとなりそ
これはいときつくしらのに　夕霧と　健物はよき義なと
あいあれて
おもしき義
ことしなりりいと　河 弟男くし義也　秘
こころよりは墨滲まさりけ
いまくし義そらなりの世れは　河 源芸の朧への横しうしろあつ侍
よろくなりいらしさうなと　奥 夕霧なと女二宮と猶んはりなに
あいなんことはと　必 さればよ迷らんといふの猶くなり安
せとしいりいれ会いうてくしきゆへよ迷らん

すかせとよりあそびんといふよりさいはひありけると御定
右　春こそは人の心のさかりにはさかりんとなほひさしくとは命なりけり
秋さへ夜着の内に分行物一月より載せさへあそびれといへり
りの分は分身のうらおりいのちあるりにくい御くしと云の
さくはあさへ送りれとみてさかり梅く塊の分をはあさへいのうり
又は御く志気とは命をちうりいの分は流薄にめんくとらく
春のうり時よりの分あけれは紫苑にさくいふなるなり
夕霧　此しらればかりて無分けり白はきりきり段されはし宿の梅とて
左　うら枝されおりしとは女二文と柏木と二人（中の一人）指されて
秋　右なりし

五さしあれは　　夕霧はうこくうかくしあくららちんしあまて
五十九　良宗　さの春れ柳のめくよそ玉はめく鳴ちうの宿のゆくへ志らねとも
右　五十　浅みどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か
秋本一首最も折に　なりし
必　御息所の分にあまそとは月よ深きとよせてよあり　歌

心のうりふりとは志るく深くうりまさくらくれとと
いとめやさくかとありとは　　必　若まの衣の中よりさらしこそあれ
うあく人分れとはらへぬ分し浪つかやうさいめ春なし
ちぐのおとしよ　　夕霧の一条の宮よりうり段仕大将とさくよ
とよらいりしさうましたなり
れいくの　　出居　　必　つれのあこと　歌
ためうはいく　　黙頭ゆくへは当面しいのりまくいきをやうしくれしく
出浴もこ夕霧あとをはらんしくくは詠よあられますうへし
あやなうしよりもけれ　　右けれ勝こ
これは子のうけなれそうくは君ましきつけこ親の喪よあこそうこ
とはれうくわかりかくありなれとも惣しくもたうは三条に宮よも
喪よも喪よ孝といふこされぬ人こさうりよりうちかくうちもる心　歌
親の孝にはとうこしく人あれはかくいへり　歌
右　孝経曰孝子之喪親也（父母没斬衰居憂謂之喪親也）哭不偯礼已容（斬衰之哭）
其声若往而不反無依遠餘音也喪事質素无容儀取以手於
長也　親の喪にうらはらうれとこさりそれよりも猶今

前後其道の歌にや侍れハとも一統云致仕大臣とは三条家の
六条院は業平の時も大将なり然ニ中将なりしハ四品の孝
君の時よりとは時ハ何歌きこえつれハとなりとりたて
三条くまつりの中より
夕顔ハ致仕とみえくるし柏と思ふ所と
致仕の君夕顔柏木との中より引して
御中よくもの也
夕顔ハ なりけれ
一条の家より渡りてくり侍る
源の宇治との二より
形のちかうなることとなり
御息所の西の方ハとふらふかこよりひ給へる
多かくらくもと
つまハかこうりよ和気なりくんともてなし
おこりなりし人なし
致仕の君は右大臣のことりたり
玉ハやくとなる一の
源とおさへ置のね絃なりけり
はうからい
致仕大臣の村
葵上のみそ 弄
君の源氏 君の
弄 柏木のみそといふ
とわかこともうけすと
其ハおりて入出わりの方ハまつのはなし出すもの心ちくなるとなき
ほうき給申済なとおもハ為のかんて
茎ハうし大木ハ桃柄うらく
の息所ハ殊に安信の家にて流されなくへのおかさん桃葉を射と桜開へ家

花の家ともくまなきかきねのいつくなるらん
おとろきうちおもしろ
かしこ木ともみしらぬ人の子なりと
わり物の中おりしハ
弄 柏木はかすとみつく歌くハ安信かもまたよ
よしに見るすなくらうらかりしこと無かなと
行きさうなる
秘 家ハ安信のあるやとことかりなと
又なりかきくなりぬなり
弄秘 大臣ハ彦ましきんのさうは
花おりふことよ家のあるらし
秘 紀とりかくに記見もとあからしれ汲む川かなり右よく
夕ニ死の宮に候
坊 夕顔の雲ハ佐之ハ物さふんのさ波なりけり
あふしとてふ宮にて待け
たとうらかりよ
多ふそめをしめなか
秘 夕顔ハ佐玉木よりそとと
此方より夜
弄 夕顔ハともつてにめりしけ日すうしともかなと如こく
必 ら冷泉院の方はそうかもそくへかね
致仕大臣 これよりしむつらに
木の花より紫に女にくさうれさよ虫の夜きこうち言に
必 子の服と嫡子かうかりようりくこうれとは果よしせてり
弄 其事ハ正よりせてり同さ子の服喪と親の服あへりの宮り

いう活して親の子に眼をかけ者ありけるか句錦に今よし者あるかに
近夕ぎり
本の下子かりよせつり
為義へもおとハさりけん手をとりて夕のきまに居きてけるとぞ
必
かしこき子をおりしいけあまりしきうとも
弁の君
弁 紅梅のおとしあうへし
うらめしやすゑの夜さへうれきゝしをまもりさらすは笹にちるらん
必
一羽身にさんとの事をもかすまくさうも
少うれきこしハ子をなつ哉あも
大将殿は小方
必 雲る為たりけり
殿ハ出へとしに
必 夕霧と
弁 夕霧は小方と殿とも思しとてあり
大将殿へとハ無きと沼の葛うら給ハ為なり
かの一条宮よりもつゆのまとかつひ
落葉宮と夕霧にとつて婚と
ひとつ父子の宮方に本正像
とすへてうら新縁の時分に
まいのもとつりおつり
秘 夕霧なり
弁 夕霧一条宮へ息とうりあうて
庭も雨うしわさと出る
おもしろき恋やとと

物めくらん
必 かこたれぬるけなり 弁
一むら薄をさへのりしきてよ
白石
君かうえし一村薄虫の音のしけき野へともなりにけるかな
秋は山ハ古利茎中ねなうもうすくうれさうしのさ夜をとんく
よれうらう狩衣ゞよあつりおもしろう
虫の音そたらん秋
今ハ荒たるハ虫の音をたてん秋をといや
あらくうもを閑おりしるる只薄の生ひかりくるそへりさく秋の月
必
虫ハ舌の音ちらけらん秋はいつらんとこむおりしるらく
果に優風あしへ冬は一村薄露ちりもく虫の音をそらし秋風そく
秋野の月あハ虫の音もしけき哉聴へと云り
白 伊予篇　芦篇
いよりけもし
必
眼茗め篇
弁
眼茗め花の精と
同をいよれきもうし 梅本ぞて落葉宮
まらくのわりし眼茗め家に申へまややもり一番表あんく外とをきと
あともなとも絡まかりし宮
必 夜はれしてハわれそて能々おれたと
きそよハ庄のこまるらへて
弁 夕霧かあハ内よりけり
自

絵かける義之　抄 は清乱とうけんみなよきしかるのつかた
とく拙なし由きこえけれは　御息所のもろりしらくさとく
出のふかとこくあいきつ歟なり　連理なりなり
かしたる木とうえてと
弄 夕霧女宮にかけうれたまへ
連理の心也　在地願為連理枝　長恨哥
湖 おもはしれ枝ありなくなれん葉守の神の御ゆるし
花 おとなりはなれはこなりしにと葉守の神はなりしと 御息所
必 なれはなりえとと 柏木と楓との枝にある枝まくれは
新古 ゆりしとゆくへきことも葉守の神 柏木なりしと 後撰
時しもあれ名は葉守の神月夜にはあはれ
弄 おとなりしなれはこなりし枝なり枝にあまんとと
抄 後撰 枇杷大臣としこゆりとくへの心とらくとあり
河 柏木に葉守の神のましけるをしらてそ折したゝりなさるな
大和物語 枇杷左大臣仲平より 家よりしたまへの
わりたまをおりにもかまつりけりおらせくかきつけてまつりける

後撰
河海抄 我か宿とたのまぬ人の木の葉のなりしかたにはおもひおこせよ
柏木に葉守の神のましけるをしらてそ折したゝりなさるな
此贈答の心も葉守の神は柏木の名也
なつくれ木とはちかくあはれ唯柏木とのことかと　弘仁式の三輪
柏木の衛門督見ゆると随従古人皆案本なり録之由　後撰
自筆れなたには柏木宮家にかたにはいつしたる木とそなすす
必 夕霧はかくかなしといふ方なるとおもひかけれと
河海抄 おりつく柏木は葉守の神はゆるしたまへ人なつかしくなきとの物かたり
柏木へとおりつりは此方御息所の宮なるへし　花
私云女二なりへし　いと弄
抄 女二葉宮なり
秘 御息所の女宮のなるへし　此宮はやりあすとはなく葉守の神
まことしゆるしは御ゆるしきとと　後撰枇杷左大臣の贈答と
ゆるくさなり　私此女宮は落葉宮の事とみえたり
うちつけなりけれとも葉　抄 此物とのれ夕霧の風流なることか
あはれは深きにそのとそ
私 葉守の神の御ゆるしありきとおもふし

涙そゝく袖しほつかとうらみたるなりとりてよみ〳〵しか君の
涙そゝくかな袖　落葉宮のいとことに御息所のめいに
ち世中──と　必 御息所の消
わかれくしらく　おりいよ〳〵つらく月日を送りたまふと
おもしなけらい　必 夕霧すみ給なり
よろつのことに行かへきこえて　必 いかなれなけれとかきりあるものゝなと
さにつよかはりのあるか　私 なけしさのまされりよのつねの世にせは
涙もきゝとまるへきなけれは　此宮の宮をゆくさき
くりかへしかたかはりもやなと 弄　必 夕霧の宮なり
此の文まいらせけるしようなり
必 夕霧のおほんこと
弄 女二宮のおもひと夕霧の宮をおもひいくつかくらひきこえのみ
わすれられはいふよへにうつりかはるみなと　必 中ゆふかたへきこえ
少 夕霧の宮中にも落葉の宮をおもひいたはりなり
こちをいとまかなきを　必 女三の宮かへしは おとこりのかれんと
なかくかゝりかはりへともさいわききこえさせたまへは宮をな

とはいへ御手紙さ御前──や　花 たゝのめかくらの御気なりたり
へきともわくるのは何かまし──きこえ　宮をせすてたのもしくわれと
又何のまし──きこえとは我おんなのなとえて嫁きこえつはそうらよ宮を
まとりかるとは何のまし──きこえ　一つよ宮もるはせを御前──やとそり
祕 世の人をいつりかんのわしと宮をもとの二つ此二つあつは宮をれ
あり人まれ侍さ御前──やとは御くのことをいつかは御前かりとて
私 此為の義はさしら宮をもちて言西わりかんのめよりりくへ
此いはくもうはと又何の御前──きこえの人のゆしわかさの所
と何のまし──きこえの人のゆしゆよ宮をまうとえさんしさ御前──きこえ
うていひりそくゆけは宮をせ我等と夕霧の男子と此其等
いぬは手紙むしこま　弄 此紙は南きせいひめて
少 むかしまとは柏木なりしいまたらへの宮もしと
手けうちりのくまうそてろうよ　弄 手けまちくろき
河 夕霧の史人手けうの御消息なり
かのおとこは　少 柏木の　弄 源氏のなの
必 源氏のなりとく　今宮柏木とかのかたといふんなと

おとしといふはつよきて深くとらへし是ハ柏木の事にて御ての
此親は女房ハ深とみえたりかるをハたましきとしかうて柏木前にをこと
後の例のをとられおとしと云り深の御ためし
これハおもしろし　夕霧　冬…かへしたまハさと思ふによかけ
雲霰深…是ハりのにしくよかわくまの和氣の名称に
おれあるしハうやへをよくとも　房葉ふ名と夕霧とおつへこちてくの男
いうあるやうにみえつるよ草木もしをるゝおとし
嵐在の草木の乱文をふくまんしめハ此句時平ハおとし外男
保忠のうし秋ことをよしとありて吟し給ふ大河海
保在のうりと右将軍と仰りたる大将の房名をハ将軍と号ス羽林軍
幕下といふとも文大臣當の房名を今出将軍と云り家より将つう
右近衛猪とも房名今出将軍と以て右将軍とのつてよ大将を
草の初秋ともうたとありしと仰しくあるもおてに寄そ色更しく拍子そ
出りうろの草木アんしろうるとなりかりさくかまいなくつきし柏木ハ
今出将軍の外はうくかり
天暦元年出不作右将軍基　草木秋　作者　右大将保忠まて

作者（左大臣時平息　母は康親王女）仍て代としてこの此歌字本説ハ秋と云ふ故
今あらためて嵐と補せるものなりこち公保美なりける和歌月
のはなりしが秋の字まうくハ康秀か歌ある嵐の字にて時分を
挑むるハ此歌の心をさとりて眼前の景乱しつる納言は座をしく
ある出りの為をかんしはふりうて如しこの秋のぬきりのくかゝれ
くれくこゝとも秋しふるなりとわれはるゝ文選
宮景公頭言云仏撰の和漢朗詠に　信森枯柳跡　楓春無青色
獲落落蒲懐　穷秋有秋声とあるハ公乗億の連昌宮賦の中一句に
賊にハ東韵の列なるを秋風といふと色と風簾對に此ルきりける
契字よ支くてきかり色契の景色を深屋りよ風の心を行りく
あらはいハ作るへいり此歌絶童を向しと補しふる
ありたる郢曲し実よかれの後世中にの己をまの不思
もとくし是とし完と古此為うろ大納言成通卿はよ糸のかく
あろうかよう人来とせしとふらいはあらせんとするとわれはらつかう
しとあるやうくとまこやうしせさせんと北おりすといひ夜本柏と高雅に
うるいうつくる我めもとなりかせらくそれうるより御んとうるといさうり

ことはの人感しまりけるとなりけるを法五出家の後ハ着爲宗済
叔葉ありとりし朝緣の下官とは胡漆倒僧へいりとせられしきり
なくへともへて京乱と称せらるゝ不可称計
それしいとちの義をの　必乾平六年のうちありしこと
身於勤大納言正三位陸奥出羽按察使兼行右近衛大将藤原
朝臣保忠乾平六年七月十四薨四十七号八条大将時平公
一男本朝風筌先祖保忠より此物語の時代たらしとそれハ按
ときらく物しとなくもくたりなきるをとんりにをせ中
よとり口義らく此人をおもしむとき
△私云ちりしとといとしとは今右おもしむりのこ
私ちりしてとく保忠のあいととも父家務のうりて出家し いりと著給
又若葉下に右大将遂辞しりひみりしとありとかりりよ父家務右大将
よめりつりもへ命とと保忠やよ出わしぬく云と兄大臣東三条
秘　おりしと知るとは今右おもしむりのなり
わさらしか人ぬ　注性アダフト
もへくしきりく様ハさうり物りく　ぞもへくしきりことハ慶賀也す

史実こし義るすと
なさけなくさてこう
うへよ此
奥今上所るかに
ありし紫のうへのいとれと
月日またるへくおほうり
御る若菜としれことおれしいうのことおほきとこ
こゆるときかみをと
ちいるさりかし
若菜下に書とゆ用したと

私もへくしきこハ為識と謂をとのるすあへし
私へよあさけらし義御と
必今上の御琴の師と
朱雀ハ今上の御琴の師と
必りとりいれ々くうりましにいうり
源ハ太くこの夜よなとしらとも女三の
必うりかなうり
必例の書とりなし